「経済学由来の倫理学」とは？
——ジョン・ブルームの所説に寄せて——

折　原　　裕

はじめに
第1節　経済学と倫理学
第2節　人生の価値
おわりに

はじめに

経済学は、その成立までさかのぼれば、道徳の問題と無縁ではなかった。経済学の父になぞらえられるアダム・スミスも、もとを正せば、道徳哲学者であった。スミスは、経済学の著作である『国富論』に先行して、道徳哲学の著作である『道徳感情論』を世に問うていたのである。

それは、決して、スミスが道徳哲学に飽き足らずに、経済学に関心を移したことを意味するものではない。スミスにおいては、『道徳感情論』で展開される道徳哲学と、『国富論』で展開される経済学とは、抽象と具体との関係になるのであり、したがって、両者があいまって、スミスの学問体系をなしているわけである。

そこでまた、スミスの学問体系を総体として捉えようとする場合に、『道徳感情論』寄りにスミスを捉えようとする立場と、『国富論』寄りにスミスを捉えようとする立場と、双方の間に対立が生ずることにもなる。この対立を反映するのが、いわゆるアダム・スミス問題であることは言うまでもない。

とは言え、小論は、アダム・スミス問題に立ち入るものではない。[1] ここで確認しておきたいのは、経済学が、アダム・スミスの当時は、道徳の問題と深い関連を有していたことである。

また、日本の経済思想史を振り返ってみるなら、江戸時代に活躍した経済思想家たちのほとんどは、経済の問題を道徳の問題との関連において、と言うよりも、道徳の問題の一部として論じていた。[2] 日本の経済思想史は、道徳の問題に集中して、アダム・スミスの『国富論』のような、本格的な経済学を生むことなく終わった点に、かえって特徴があるのである。

だから、経済の問題と道徳の問題とは、かつては、洋の東西を問わず、決して無関係なものではなかった。むしろ、経済の問題と道徳の問題とは、元来、密接な関係にあるものと受け止められていたと見てよい。

ところが、経済学の本場であるイギリスにおいては、スミス以降、経済学が自立の度合いを深めるに連れて、経済の問題と道徳の問題とは、次第に遠ざかってゆくことになった。たとえば、古典派経済学の完成者と言われるデーヴィド・リカードが果たしたのは、スミスの『国富論』を、純粋な経済理論として精緻化することであった。古典派経済学を一掃的に批判して見せたカール・マルクスにしても、その著『資本論』で述べられる経済理論は、リカード以上に純粋な性格のものであった。

このような経済理論の純粋化とともに、経済の問題と道徳の問題との関連は、徐々に忘れられてゆくことになる。とりわけ、ライオネル・ロビンズの希少性定義を受け入れて以来、経済学の主流派と目される新古典派経済学は、希少な手段の合理的な配分にたずさわるのが経済学であるとして、価値判断を放棄してきた。こうして、道徳の問題は、完全に経済学との関連を断たれて、現在にいたっているのである。

そのような中で、近年欧米では、経済と道徳との関連を考え直そうという動きが、顕著になってきている。アダム・スミス問題のリバイバルと言うべき事態も、その一翼とみなしてよい。市場とモラルとの関連が、関心

を集めつつあるのである。

小論では、こうした市場とモラルとの関連を取り扱った著作の中から、最近出版されたジョン・ブルームの『経済学由来の倫理学』[3]を取り上げ、簡単な検討を加えたい。このブルームの著作は、新古典派経済学の枠組みによりつつ、市場とモラルとの関連という問題を取り扱おうとしており、その意味で、件の問題に対するアプローチのひとつの極を示す可能性が高いものである。

第1節　経済学と倫理学

1

『経済学由来の倫理学』のイントロダクションは、「経済学と倫理学」と名付けられているが、ブルームはそのイントロダクションを、次のような言葉で書き始めている。

「経済学と倫理学との行き来は、双方向的に行なわれる。どちらの学問も、もう一方から学びうる。」[1] ブルームによれば、経済学は、経済のアレンジメントの評価に関わり、また経済問題を政府がどう処理するべきかに関わる、学問である。この意味で、経済学は、経済的な事象について、正しいか間違っているか、善か悪か、を判断する。こうした判断の基準として、倫理学が援用される、という関係になる。他方、ブルームの言によれば、経済学は、倫理学の側に役立つような方法を、開発してきた。だから、その限りにおいて、経済学も倫理学に教えるべきものがあるのだ、というのがブルームの立場なのである。

ブルームが考えているのは、具体的にはどのようなことか。それは、次のような叙述に端的に示されている。「この書物は、経済学の方法が倫理学に貢献しうる諸分野のうち、ただひとつに集中する。それは、互いに対

立する、相異なる利害や関心を、バランスさせることを我々に要求する、倫理学上の諸問題に関わるものである。たとえば、我々は、未来の人々の利害と、現在生きている人々の利害とを、バランスさせねばならない。退職者の喜びと、若者の喜びとを、恵まれない人々の幸福と、成功した、または、幸運な人々の幸福とを〔……〕バランスさせねばならないのだ。[5]」

つまり、ブルームの問題は、バランスという一点に掛かっている。これは、ブルームのイメージする経済学の性格に規定されていると言ってよい。ブルームにとって、経済学は、希少な手段の配分にたずさわるものに他ならず、経済学が倫理学に関与する場合も、そこでの配分は、市場の均衡と同じような、バランスを成立させうると考えられているわけである。

そのバランスは、上の叙述にあるような、相異なる人々の間のバランスばかりではない。ひとりの人にとっても、ある要求と他の要求とのバランス、という問題があるからである。それゆえ、ブルームは、次のようにも言う。「患者個人と医師とは、しばしば、末期的疾患のための異なる処置のどちらか――人生を延長する処置と、生きている間に人生をより良くする処置のどちらか――を選択せねばならない。人はみな、長生きのために、うまい食べ物をあきらめるかどうか、思い迷うのだ。我々の人生をプランニングするに当たり、我々は、未来のよきものと、現在のよきものとを、較量（weigh）する必要がある。[6]」

したがって、問題は、バランスの問題であると同時に、較量の問題でもあることになる。こうして、ブルームは、次のように主張する。「較量の実践的な問題は、経済学者と倫理学者の双方の領分に入る。〔……〕資源の希少性が、これら資源のための、代替的に可能な使用を、較量の上選ぶよう社会に強制する場面はあるし、経済学は、自らが希少性の科学であることを要求している。実際、この領域では、経済学と倫理学との間に、明確な境界はない。厚生経済学において原則的な問題を追求する経済学者と、倫理学において実践的な問題を追及する哲学者と、両者は、自分たちが同

じ問題について考えているのだということを知るのである。すなわち、平等は価値があるのか？　我々は未来の人々の幸福に、どのぐらい配慮すべきなのか？　自然の保護と人間の生活とに、どのような価値を割り当てたらよいのか？　等々。この書物のいくつかの章は、経済学および倫理学の実践的な問題が出会う、こうした境界線の領域に位置している。[7]」

要するに、ブルームの場合、倫理学上の問題と経済学上の問題とは、いずれも、較量とバランスの問題として存在し、その意味で言わば相似形をなす問題なのである。

2

ブルームの立場は、倫理学的な価値、徳や善というものが、単一の量の大小として把握可能という、了解を含むであろう。つまり、徳や善は、効用の大小と同様に、何らかの量の大小に還元可能でなければならない。ブルームは、そういういうものとして、倫理学的な較量やバランスを考えているはずである。

だから、ブルームの言うバランスは、アリストテレス的な中庸とは、全く意を異にするものである。アリストテレスの言う中庸とは、われわれ人間が持っている、相互に対立する性質や態度の好ましいバランスを意味しており、それは必ずしも、単一の量の大小に還元されえないものだからである。

たとえば、アリストテレスによれば、徳としての勇敢は、恐怖と平然との中庸である。恐怖が過度であれば、それは怯懦と呼ばれ、平然が過度であれば、それは無謀と呼ばれる。この場合、恐怖と平然とは逆の方向性を持つが、恐怖の大が直ちに平然の小を意味するわけではないし、恐怖の小が直ちに平然の大を意味するわけではない。だから、恐怖なきことそれ自体は、アリストテレスの表現では「無名称的[8]」であり、それだけで勇敢た

りうるわけではないのである。

確かに、恐怖を感じないことは、それだけで人を勇敢な行為に導くものではないであろう。むしろ、多少の恐怖があったとしても、なすべきことをなすだけの平然の強さがあってこそ、人は勇敢に行動できる。それゆえ、恐怖と平然とは、それぞれが一応は独立した要素と考えられる。だからまた、恐怖の程度が必ずしも小さくなくても、それに打ち克つ程度に平然が大であれば、中庸としての勇敢は成立しうるのである。他方、場面によっては、平然の程度がさほど大きくなくても、恐怖の程度が小さいだけで、その場面に必要なだけの勇敢が発揮されることもありうるだろう。

つまり、勇敢という中庸は、一本の数直線上の原点ゼロとは、大いに性格を異にするものである。それは、効用のプラスとマイナスが相殺される点ではないし、コストとベネフィットがバランスする点でもないのだ。

アリストテレス自身の言葉によれば、「徳は『中庸』であるが、しかしその最善性とか『よさ』とかに即していうならば、それはかえって『頂極』にほかならないのである。[9)]」徳は、谷底のようにエネルギーの小さい場ではなく、むしろ山頂のようにエネルギーの大きい場である。だからこそ、徳は容易ではなく、尊いものだとも言えよう。

上述のような事情に加えて、「あらゆる行為、あらゆる情念が中庸をゆるすわけではない[10)]」という問題もある。すなわち、悪意や嫉視といった情念、窃盗や姦淫といった行為は、それ自体劣悪であり、その超過や不足が非難されるわけではないのだ。

だから、倫理学的な価値としての徳や善の問題は、ブルームが考えているように、単純ではない。ブルームのような見方は、2300年以上も前に生きたアリストテレスの目にとってすら、たぶん粗雑に過ぎるのである。

3

したがって、ブルームが、自らの単純な見地からエピクロスを批判するのも、勇み足と言わざるをえない。

ブルームが批判するのは、次のようなエピクロスの発言である。「死はわれわれにとって何ものでもない、と考えることに慣れるべきである。というのは、善いものと悪いものはすべて感覚に属するが、死は感覚の欠如だからである。それゆえ、死がわれわれにとって何ものでもないことを正しく認識すれば、その認識はこの可死的な生を、かえって楽しいものとしてくれるのである。[11]」

ここでエピクロスが述べているのは、死は感覚を越えており、感覚で把握できない死を恐れても仕方がない、という点につきる。つまり、エピクロスは、死がわれわれにとって善いか悪いか、ということは問題にしていないのだ。それは、問題にするべきではない、というのがエピクロスの立場であろう。エピクロスにとって、生を楽しみ、生を享受することこそが重要なのであるから、確かに、死を恐れるあまり、生を十全に生きられないのでは、生きる甲斐がないのである。

だからこそ、エピクロスは、こうも言うわけである。「死は恐ろしいと言い、死は、それが現に存するときわれわれを悩ますであろうからではなく、むしろ、やがて来るものとして今われわれを悩ましているがゆえに、恐ろしいのである、と言う人は、愚かである。[12]」つまり、実際の死ではなく、死の観念が恐ろしいという立場こそ、エピクロスの議論の標的なのである。

だから、エピクロスの問題は、死を恐れずに生を楽しむか、死を恐れて生を楽しまないか、という問題である。それゆえ、エピクロスは、死を好ましいとは決して考えない。むしろ、エピクロスは、死が好ましいかのような主張を絶対に容認できない。彼は、次のように言うのだ。「はるかに

悪いのは、こう言う人である。すなわち、生まれないのが善いのだ、『だが、生まれたからにはできるだけ速やかにハデスの門をくぐること』と言う人である。というのは、もし確信してこう主張しているのなら、かれはなぜさっさと、この生から去ってゆかないのか。[13]」

エピクロスの述べていることは、誰の目にも明白であろう。ところが、ブルームはなぜか、エピクロスのコンテクストを見落としてしまう。ブルームは、エピクロスが問題にしていない、死そのものの善悪にこだわってしまうのだ。

ブルームによれば、エピクロスは非相対的（noncomparative）な見地に立つために、極端な結論に短絡してしまう。エピクロスの見方は、ブルームの定式化によれば、「Aが善い感覚をある人に与えるならそれだけで、Aはある人にとって善であり、Aが悪い感覚をある人に与るならそれだけで、Aはある人にとって悪である[14]」というものである。

これに代えて、ブルームが推奨するのは、相対的（comparative）な見地であって、それは次のように定式化される。「AがBよりも、悪い感覚を凌駕して、善い感覚がより大なるバランスをある人に与えるならそれだけで、Aはある人にとってBより比較善（better）である。[15]」

ブルームの考えるところでは、このような「相対的」な見地からするとき、生と死とは直接に比較可能になるらしい。「善い感覚が悪い感覚より優勢であれば、死は、生き続けるより、比較悪（worse）だ[16]」と、ブルームは主張する。なぜなら、「エピクロスが言うように、死は感覚の欠如だから[17]」と言うのである。

しかし、これは容易には承服しかねる主張である。ブルームが述べているのは、苦しいことが少々あっても、楽しいことが多々ある人生なら、生きるに値するが、楽しいことが少々あっても、苦しいことが多々ある人生なら、死んだ方がまし、ということでしかないようである。だが、本当にそんなことが言えるのか。そうした判定は、一体誰がするというのか。当

人の感覚だけが頼りであるならば、そのようなことは言えないはずである。ここには、エピクロスが注意深く排除していた、神のごとき第三者の視点が、暗黙のうちに導入されているのである。だから、ブルームのエピクロス批判は、お門違いと言わざるをえない。

4

以上、垣間見たように、ブルームの倫理学に対する理解には、粗雑な点が否めない。ブルーム自身は十分に自覚していないようであるが、倫理学は、アリストテレスやエピクロスといった先哲の頃から、長い歴史を刻んできており、その歴史は、経済学の歴史よりもはるかに長いのだ。だから、経済学が、倫理学ときちんと渡り合うには、それなりの覚悟が必要になる。ブルームのように、経済学と倫理学とが、あたかも同一次元で簡単に行ったり来たりできると考えるのは、安易に過ぎるのである。

ブルームのような見方は、要するに、経済学が倫理学に貢献しうるはずだという、前提に規定されて出てくるものであろう。そうであるならば、その貢献とは何であるのか。これが焦点となる。

ブルームの書物の論述の中には、形式的なものも多い。たとえば、推移性（transitivity）をめぐって、アルプスへ行くよりローマへ行くことを選好し、ローマへ行くより家に居ることを選好する人が、アルプスへ行くか家に居るかの二者択一をせまられたとき、アルプスへ行くことが理論的にどう評価されるのか、といった問題を、ブルームはかなりていねいに論じている。あるいは、通約不能性（incommensurability）をめぐって、プラスの価値とマイナスの価値との境い目について考察し、その境い目が連続的な場合と非連続的な場合とに分けて吟味することなどにも、ブルームはかなりの紙数を割いている。

しかし、小論ではそういった問題には立ち入らないことにしよう。ここ

では、少し先を急いで、経済学の倫理学への貢献とは何であるのか。ブルームの議論の焦点に、話を絞ることにしたい。

第2節　人生の価値

1

ブルームは、自らの議論を、いくつかのグラフを用いて例証しようとしている。これらのグラフを見てゆくことが、彼の議論の性格を理解する早道となるだろう。

ブルームの議論の中心は、公権力が行なう種々なアクションが、人々の福利（wellbeing）にどのような影響を及ぼすか、という点にある。

まず、図1[18]を見てみよう。これは、政府が温室効果ガスの排出を、容認し続けた場合と、何らかの規制を行なった場合とを、比較したものである。

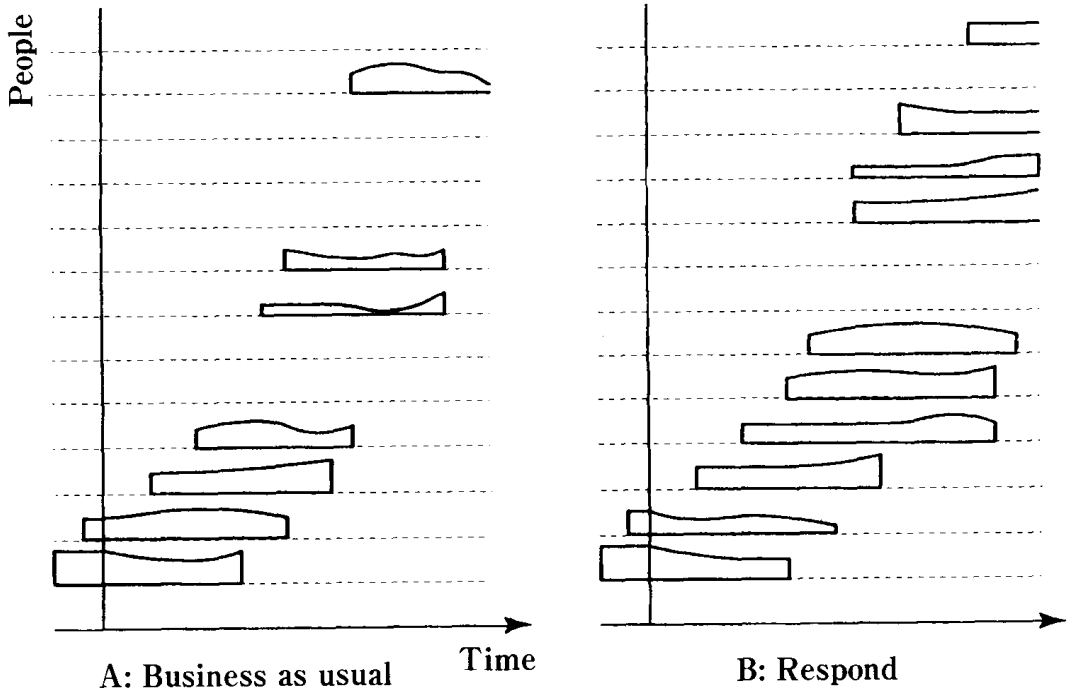

図1　地球温暖化

横軸は時間を、縦軸は住民（住民の福利の水準）を、示す。垂線は、現在という時点を指示している。グラフ上に、色々な形の横棒状に表現されているのが、特定の住民が生まれてから死ぬまでの、福利の総和であり、横棒の厚みが、その時々の住民の福利の水準である。

ブルームが述べるところでは、規制が行なわれるBの場合、近未来では、住民の福利の水準は、規制が行なわれないAの場合より、低くなる。ガスの制御に、コストがかかるからである。しかし、遠未来では、Bの方がより多くの住民が生活し、また福利水準も高く、長生きでもある。（必ずそうなるというわけではなく、ブルームが言うように、これは「例示に過ぎない。[19]」

この図1のAとBのように、代替的なアクションのそれぞれでは、住民当たりの、また時間当たりの、福利の配分が異なってくる。だから、こうした代替的なアクションが提示されるとき、われわれは、どちらがより善いかを、決定せねばならない。そのためには、両者の価値が決定されねばならないことになる。

ブルームは、ここで重要なのは、未来の価値をどう評価するか、という問題であると言う。未来の価値を、現在の価値と比べて、どれだけ割り引き（discount）するかによって、結論は左右される。未来の価値を、現在の価値より大きく割り引くなら、BよりAという選択も、大いにありうるわけである。

ブルームは、そういう未来の価値を割り引き算定する方法のひとつとして、市場価格（market price）を基礎にする方法を紹介している。ブルームの用いている例ではなくて、ここでは、最も簡単な場合として、物価上昇率がゼロの場合を考えよう。この場合、現時点で100の市場価格を持つ資源は、1年後にも100の市場価格を持つ。利子率が5％（年率）だとすれば、1年後のこの資源の現在価格は、$100 \div 100 \times (1 + 0.05) = 95.2$と、容易に算定できるわけである。

ところが、ブルームは、こうした未来の価値の算定方法には、賛成できないと言う。なぜなら、こうした割り引き算定は、「未来をあまりにも急速に割り引いてしまう」[20]からだ。なるほど、ブルームが言うように、長期的な計画の是非を問う場合には、こうした割り引き算定によるなら、未来の価値は、非常に低くカウントされてしまうことになるだろう。

とは言え、こうした割り引き算定が使えないとなると、未来の価値の評価は、極めて困難となる。未来の福利の水準は、図1に例示されているような形に、一義的に予測できるものではない。ブルームの言葉によるなら、それは「実際には非常に困難」[21]なのである。

だが、そうであるならば、ブルームのこれまでの議論は、一体何であったのか。こういう疑問が、直ちに浮かぶところであろう。経済学は倫理学に貢献しうるというのが、ブルームの議論のポイントだったはずである。しかし、これまで見た限りでは、そうした貢献は少しも明らかではない。

第一、これまでの議論は、そもそも経済学的に考えていると言えるのだろうか。確かに、経済学の香りがしないわけではない。だが、これまでの議論は、経済学を忘れてしまっても、十分に可能なものだったと言ってよい。経済学者であるブルームが、こうした「倫理学」の問題（それが、そのままで、倫理学の問題たりうるかどうかも、実は疑問である）を取り扱うことと、経済学がそうした問題を取り扱うことと、両者は同義ではない。もし、ブルームが事実上、経済学を離れた地点で問題を考えているのなら、それは経済学者ブルームの問題ではあっても、もはや経済学の問題ではなくなっているはずなのである。

2

とは言え、もう少しブルームの議論を追ってみる必要があろう。彼の書物の最後の何章かは、「人生の価値」と名付けられたパートを構成してい

る。ブルームの議論の性格は、このパートに最もよく表現されていると見てよい。

ブルームによれば、道路の安全対策費用の問題が、コスト・ベネフィット問題の古典的な例であり、それは、「生と死を含む問題」[22]だという。彼は、こう述べている。「安全のためにもっとお金が費やされれば、道路で亡くなったかも知れない住民が救われる、という便益がある。だが、そのお金が安全のためではなく、他の用途に利用可能ならば、それは他の仕方で住民に便益となるだろう。」[23]

図2[24]が、そうした関係をグラフに表わしたものである。垂線は、先の図1と同様、現在という時点を指示している。だから、現時点では、この社会の構成員は2名であることになる。安全対策支出があるAの場合は、2

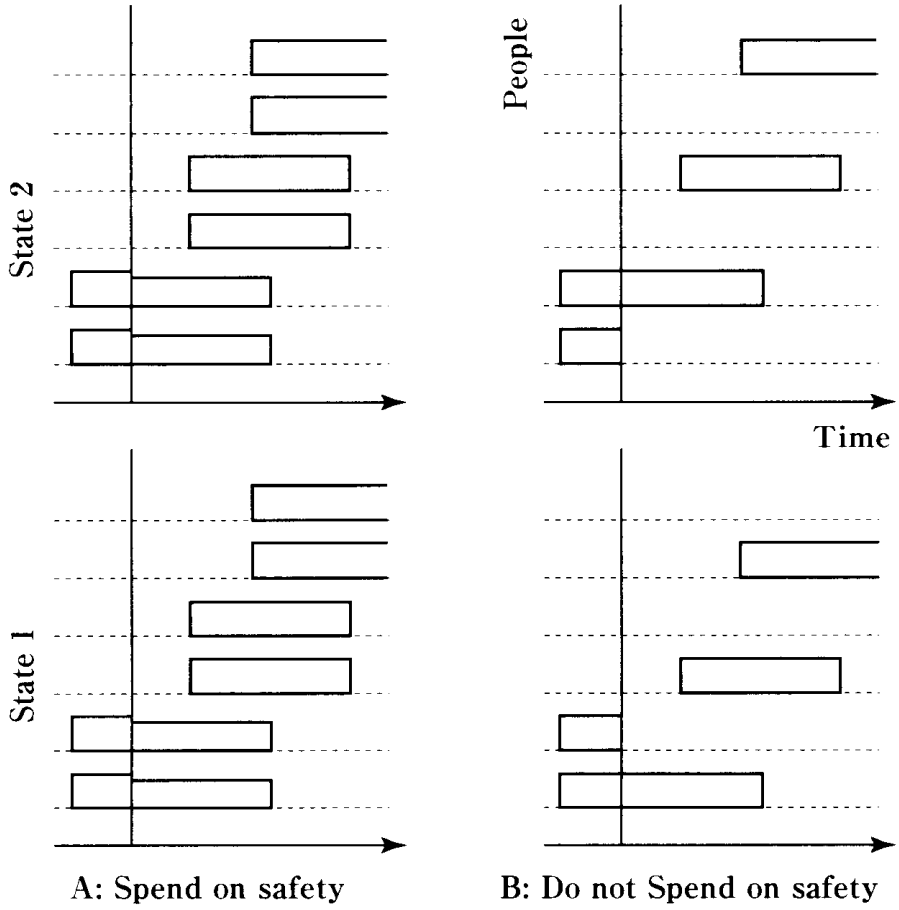

図2　道路の安全性

名とも長生きし、それぞれ１名ずつの子供をもうけ、その子供がまた１名ずつの孫をもうけるとされる。（ここでは、便宜上、「単為生殖」[25]が想定されている。）しかし、安全対策支出がないＢの場合、２名のうちの一方は、道路上で早死にしてしまう。２名のうちのどちらが早死にするかはわからないから、その不確定性が、グラフの上半分と下半分という、状態の相違に表現されているわけである。他方、安全対策支出があるＡの場合、上半分と下半分とは、同一になる。

先の図１と同じく、横棒状に表現されているのが、生まれてから死ぬまでの住民の福利の総和であり、横棒の厚みが、その時々の福利の水準である。安全対策支出がないＢでは、現時点の前と後とで、住民の福利水準は変化しない。それに対して、安全対策支出があるＡでは、現時点の後の方が、現時点の前と比較して、福利水準が下がることになる。道路への安全対策支出の負担分だけ、他の用途への支出を減らさなければならないからである。

図２のＡとＢとの大きな相違は、将来の人口の相違である。このように、人の生き死にが関わる問題では、どういう選択を行なうかによって、まだ生まれていない世代の人口に変化が生ずる。

ブルームが、エピクロスに性急な批判を加えて、死の問題を考察から排除するのを拒否して見せたのは、こうした問題を議論するためだったと推察してよいだろう。（実は、こういうブルームの書物を特徴付ける議論の構造は、デレク・パーフィットの議論の構造を、模したものだと言ってよい。事実また、ブルームは、パーフィットの『理由と人格――非人格性の倫理へ――』[26]の補論の一部を執筆したりしているのである。）

それはともかく、ここでも疑問なのは、ブルームの行なっている議論が、果たして経済学的に考えていることになるのかどうか、という点である。取り扱われている問題が、経済学に無関係な問題だと言いたいわけではない。だが、その問題の取り扱われ方が、経済学的であるかどうか、それが

疑問なのだ。

経済学的に考えるということは、商品経済的な形態に即して考える、ということでなくてはならないはずである。ブルームの議論は、形態をはぎ取った、言わば生の実体を、直接に取り扱おうとしたものである。（生の実体を、直接取り扱うことは、実際にはできない。それは、一種の仮構に過ぎないと言ってよい。）そのような取り扱いを意図した時点で、問題は、経済学の問題ではなくなっている可能性が高いのである。

たとえば、価格のないものに、仮に分析者が価格を付与しても、それは市場で定まる価格と、性格を異にしたものでしかない。つまり、それは、もはや価格ではないのだ。だから、ブルームの描くグラフの横棒の厚みは、価格と関連しているようで、実際には、それは価格とは無縁のものでしかない。その厚みの単位は何であるのか。この点が、必ずしも明らかでないのも、当然ということになる。

要するに、ブルームは、経済学から逸脱している可能性が高いのである。ブルームが議論しているような問題を、経済学者が考えてはならない、などと主張するつもりはない。ただ、そういう問題を取り扱う場合、経済学はあまり役に立たないことを自覚するべきだろう。ブルームの議論している問題は、経済学の手に余る問題なのである。

3

ブルームの図[27]3は、緩和治療と積極治療と、両者の相違を表現したものである。緩和治療が行なわれる左側のグラフでは、現時点以降も、患者の福利水準は低下しないが、早死にしてしまう。積極治療が行なわれる右側のグラフでは、現時点以降、患者の福利水準は著しく低下するが、長生きできる。

図[28]4は、老年者を救命する場合と、若年者を救命する場合と、両者を比

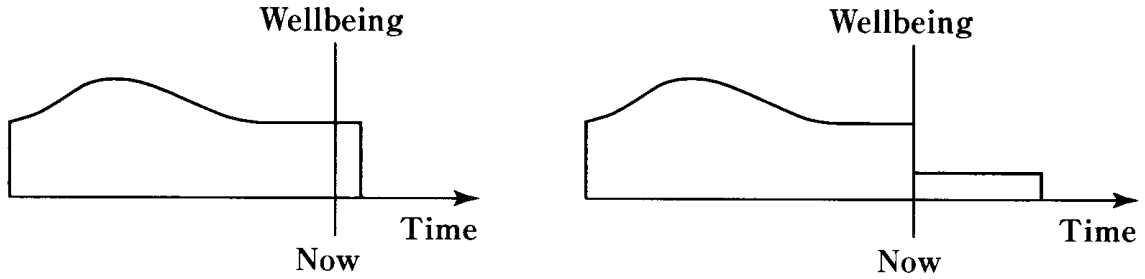

図 3　緩和治療と積極治療

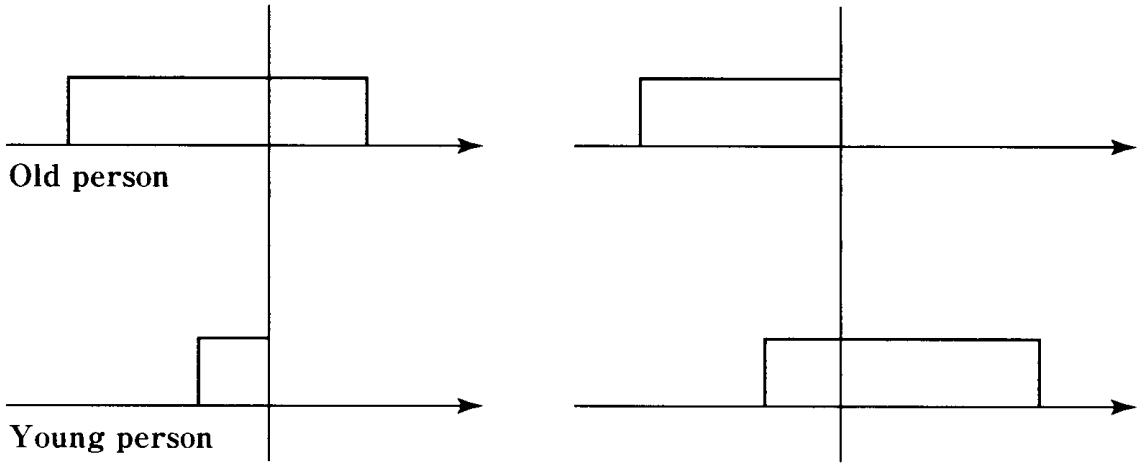

図 4　老年者救命と若年者救命

較したものである。老年者を救命する（若年者は救命されない）場合の、現時点以降の横棒の長さは、若年者を救命する（老年者は救命されない）場合の、現時点以降の横棒の長さと比べ、短くなる（老年者の余命が短いため）。

他方、図[29]5は、図4の関係に、子孫の人口も書き加えたものである。老年者を救命しても、子孫をもうけないので、人口は増えないが、若年者を救命すれば、子孫をもうけるので、人口は増加する。

図[30]6は、2人目の子供を持つ場合と、持たない場合との比較である。2人目の子供を持たない左側のグラフでは、一人目の子供の福利水準が上昇する。

しかし、ブルームが描いて見せるこうしたグラフの数々を、これ以上追

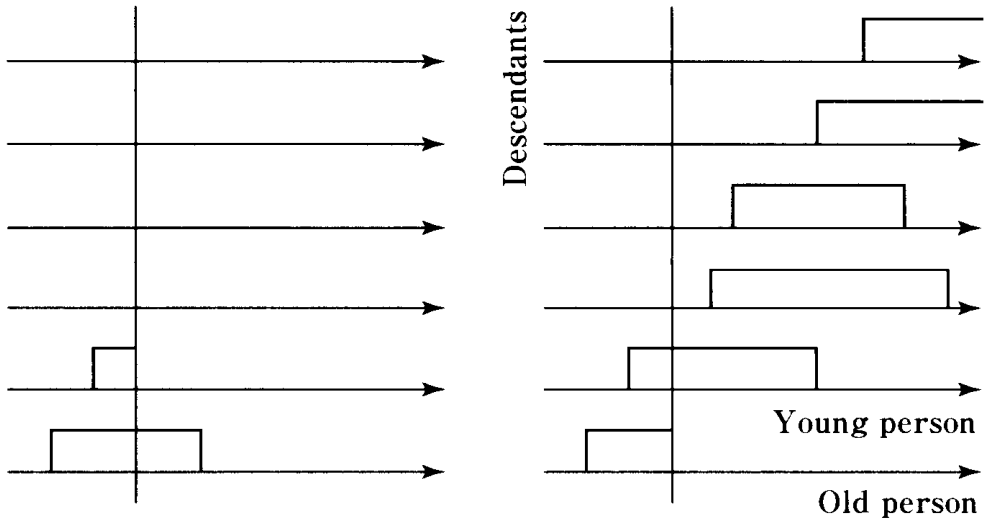

図５　老年者救命と若年者救命（より現実的な表現）

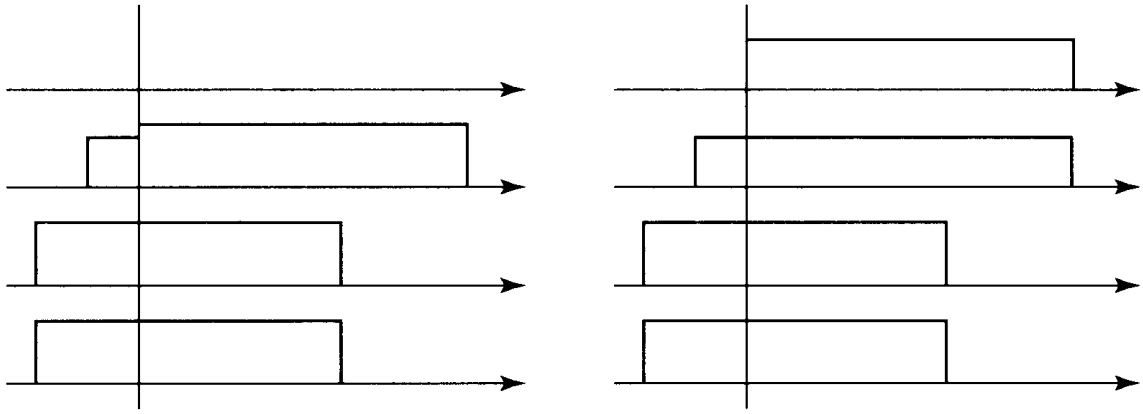

図６　２人目の子供を持つべきか

っても、もやは意味がないだろう。ブルームが問題にしていることが何であるのかは、実に理解しやすい。だが、それをそのように問題にすることの意義は、ほとんど理解できない。そのようなブルームの考察が、経済学によるものとは思われないし、まして、「経済学の倫理学への貢献」であるなどとは、とても言えないのである。

実際、ブルームの書物に、これこそが「経済学の倫理学への貢献」だと、明確に主張されるものはない。むしろ、ブルームは、そうした主張を行なうことには、慎重な態度を取っており、その点には好感が持てるのである。

だが、それは同時に、「経済学の倫理学への貢献」が、言葉だけのもので、内実に欠けることを、明示している。皮肉なことに、『経済学由来の倫理学』というタイトルを持つブルームの書物は、経済学由来の倫理学というものが、たぶん不可能であることを、結果として示す仕儀に陥っているのである。

おわりに

倫理学にたずさわる者が経済学を手掛けても、一向に構わないのと同様、経済学にたずさわる者が倫理学を手掛けても、一向に構わない。それは、経済学の父と称される、アダム・スミスの例を持ち出すまでもないことであろう。

しかし、そのことは、経済学者が、経済学と倫理学との間を行ったり来たりしてよい、ということを意味しても、経済学が、倫理学との間を行ったり来たりしてよい、ということを意味するものではない。経済学は、経済学固有の方法と課題を有するのであるから、それが安易に倫理学にはみ出すことは、いわゆる「経済学帝国主義」以外の何ものでもないのであり、十分に自戒しておく必要がある。

経済学が倫理学の問題をそのままに取り扱えないのは、言ってみれば当然なのであり、それが経済学の限界なのである。それは、学問としての経済学の限界なのであり、経済学者の限界とは異なる。だから、そうした学問としての経済学の限界を、経済学者が残念に思う必要などない。

経済学は、言うまでもなく、商品経済ないしは市場経済を取り扱う学問である。だからこそ、そうした経済の仕組みが成熟する時代、アダム・スミスの時代にならねば、経済学も成立できなかったわけである。対象の成熟が、学問としての経済学の成立を条件付けているわけである。

カール・ポランニーが言うように、「市場経済はわれわれ自身の時代以

外には一度も存在したことのない制度的組織なのであり、また、このわれわれの時代においても部分的にしか存在したにすぎなかった[31]」のだとすれば、市場経済を対象とする経済学の守備範囲は、さほど広くはない。しかし、それは、繰り返しになるが、経済学の限界であって、経済学者の限界ではないのである。

註

1） アダム・スミス問題については、差し当たり、以下を参照。折原裕「よみがえるアダム・スミス問題――フィッツギボンズ説の検討――」、『敬愛大学・研究論集』第56号、1999年6月、同「アダム・スミス問題は死なず――ヤング説の検討――」、『敬愛大学・研究論集』第57号、1999年12月。

2） 江戸時代の経済思想家については、差し当たり、以下を参照。折原裕「江戸期における商利肯定論の形成――石田梅岩と山片蟠桃――」、『敬愛大学・研究論集』第42号、1992年9月、同「江戸期における重商主義論の成立――海保青陵と本多利明――」『敬愛大学・研究論集』第43号、1993年3月、同「江戸期における重商主義論の展開――佐藤信淵と横井小楠――」、『敬愛大学・研究論集』第44号、1993年9月、同「江戸期における農兵論の系譜――熊沢蕃山と荻生徂徠――」、『敬愛大学・研究論集』第47号、1995年3月、同「江戸期における農兵論の展開――太宰春台と林子平――」、『敬愛大学・研究論集』第48号、1995年9月、同「江戸期における反搾取論の展開――安藤昌益と三浦梅園――」、『敬愛大学・研究論集』第50号、1996年6月。

3） John Broome, *Ethics out of Economics* (Cambridge University Press, 1999).

4） *Ibid.*, p.1.

5） *Ibid.*

6） *Ibid.*, p.1-2.

7） *Ibid.*, p.2.

8） アリストテレス　高田三郎訳『ニコマコス倫理学（上）』（岩波文庫、1971年）73頁。

9） 上掲、72頁。

10） 上掲、同頁。

11） エピクロス　出隆、岩崎允胤訳『エピクロス――教説と手紙――』（岩波文庫、1959年）67頁。

12） 同上。

13） 同上、68頁。

14) Broome, *op.cit.*, p.11.
15) *Ibid.*
16) *Ibid.*
17) *Ibid.*
18) *Ibid.*, p.46.
19) *Ibid.*
20) *Ibid.*, p.68.
21) *Ibid.*, p.47.
22) *Ibid.*, p.183.
23) *Ibid.*
24) *Ibid.*, p.184.
25) *Ibid.*, p.185.
26) デレク・パーフィット／森村進訳『理由と人格――非人格性の倫理へ――』（勁草書房、1998年）。
27) Broome, *op.cit.*, p.214.
28) *Ibid.*, p.216.
29) *Ibid.*
30) *Ibid.*, p.223.
31) カール・ポランニー／吉沢英成、野口健彦、長尾史郎、杉村芳美訳『大転換――市場社会の形成と崩壊――』（東洋経済新報社、1975年）50頁。